

論文内容の要旨

論文題目 ソシュールと言語学

氏 名 金澤忠信

スイス・ジュネーヴの言語学者フェルディナン・ド・ソシュール（1857-1913）を 20 世紀の現代言語学の創始者とみなすことは定説となっており、彼の名は一般に死後出版された『一般言語学講義』に結びつけられている。また 1960-1970 年代には構造主義の先駆者と呼ばれ、それ以降は言語学者としてよりむしろ思想家として知られている。しかしソシュール自身は主に 19 世紀の印欧言語学の研究に従事した言語学者であり、また世紀転換期を生き「知識人」でもあった。

今回の論文ではソシュールの一般言語学および記号学を扱っていないが、それはソシュールを 20 世紀の言語学からいったん引き離し、19 世紀の文脈のなかに置き直すことで、彼自身の思考や感情に迫るためである。その際、たんに 19 世紀言語学の客観的な歴史のなかにソシュールを位置づけるのではなく、ソシュールが言語学の歴史のなかに自分自身を書き込む仕方について検討を試みた。これはいわばソシュールの主観的な言語学史の検証作業である。その意味で本論は「ソシュールの言語学」ではなく「ソシュールと言語学」を主題としている。

ソシュールは晩年に行った講義のなかで言語学の歴史について独自の解釈を提示している。彼によれば、言語学は 1816 年にフランツ・ボップによって創始されるが、ボップの偉業はそれ以前のサンスクリット語研究の蓄積があってこそであり、しかもサンスクリット語が印欧諸語の比較・分析に適切な言語だったのは偶然にすぎない。またボップの権威は「誤りの原因」ともなり、その後の言語学の発展にとってむしろ障害となった。ボップ以降、ヤーコプ・グリムが「グリムの法則」を発見し、「歴史文法」の領野を切り開いたが、そもそも音韻推移自体偶然によって起こるものであって、グリムはそうした言語の歴史的活動を理解していなかった。このようにソシュールが言語の歴史および言語学の歴史を偶然の積み重ねとして認識するには必然的な理由があった。ソシュールは 1873 年頃にまったくの偶然によって「鳴鼻音」を発見したが、当初は

それが何であるかよく分からず、公表せずにはいた。1876年、同郷の友人がいるという理由でライプツィヒに留学したとき、その数週間前にカール・ブルークマンが鳴鼻音についての論文を発表しており、到着早々3年半前に発見したものの重要性を思い知らされると同時に、発見の優先権を主張することができなくなった。ソシュールは19世紀の言語学においては1876年という日付に偶然遅れてやってきた者だった。

鳴鼻音をめぐる論争をきっかけに青年文法学派が形成され、1876-1877年にライプツィヒは印欧言語学の中心地となる。これはソシュールによる言語学史の区分上第二期の幕開けあたり、彼は自らそれに偶然立ち合ったわけだが、自分自身がこの刷新をなしえたかもしれないということを見ると心中穏やかではなかった。1878年にライプツィヒで『印欧諸語における母音の原初体系に関する覚え書』を出版するが、この日付と出版地をもってしては鳴鼻音発見の優先権はおろか著作自体の独創性を主張することさえ困難だった。ソシュールは1903年の回想録のなかでこの著作にたいする剽窃疑惑を払拭するために、同郷の師アドルフ・ピクテとの出会いを言語学者としての経歴の出発点に置き、ライプツィヒ学派からの影響を否定しようとする。またライプツィヒ学派が対象としていた「音声形」および「音法則」を徹底的に無根拠化しようとし、このことは言語学そのものを批判することにもつながった。ソシュールの最終的な結論は、言語学にはそれ自体で定義される事象がない、論証を基礎づけるのに他よりも適切な出発点がない、それどころかいかなる出発点もない、というものだった。

このような考え方はソシュールの政治観・歴史観にも反映されていた。1996年にジュネーヴのソシュール家で新たに発見された資料には、南アフリカのトランスヴァール共和国で起きたジェイムソン襲撃事件（1895年12月29日-1896年1月2日）、オスマン・トルコによるアルメニア人虐殺事件（1895-1896年）、ドレフュス事件（1894-1899年）に関する手稿が含まれており、このなかでソシュールは世紀末の殺伐・混沌とした時代状況について自らの意見を語っている。当時はヨーロッパ列強が世界規模で植民地獲得競争を展開し、軍事的圧力に基づく「粗暴の外交」を繰り広げていた。その一環で起こった虐殺や紛争などの事件にたいして、キリスト教や人道主義などの信条・原理はそのものとしては政治的に成功を収めていないようにソシュールには見えた。彼は虐殺が虐殺であるという理由だけで有罪とされる時代ではないという認識をもっており、まず政治的利害を考えなければ机上の空論であると考えていた。そのためアルメニア人虐殺事件に際してソシュールの批判の鋒先は虐殺を命じたトルコ皇帝や自国の利益しか考えないヨーロッパの外交官だけでなく、たんに情緒的な理由で救済活動をする親アルメニア派にも向けられた。またドレフュス事件に際しては、当初は反ユダヤ主義に同調し、のちに転向してドレフュス派を自認しながらも、反ドレフュス派に関してはほとんど言及せず、むしろ純真素朴で「間抜け」なドレフュス派知識人を痛烈に批判している。

ソシュールによれば、ローマ皇帝からトルコ皇帝に到るまで、歴史上虐殺は恣意的に行われてきた。大国の外交官の権謀術数によってその犠牲者は救済されないどころか認知されない場合もある。歴史はなんらかの原理や法則によってではなく、偶然、恣意、政治的利益によって展開するものであり、個々の出来事や事態はそのつど一回性のものである。だからこそ、「情緒的」になることなく、「時宜を失した怒り」を抑え、政治性の側面から冷徹に事態を考察しなければならない。これがソシュールが歴史から引き出した教訓だった。

ソシュールが当時の国際的・政治的な事件にたいして冷徹な現実主義者でいられたのはスイス人であることと無関係ではなかったように思われる。彼には祖国スイス連邦共和国にたいする思

い入れがあり、イギリス、フランス、ドイツなど帝国主義・植民地主義によって領土拡大を目指していた国よりも「文明化された国」と考えていた。だが彼はたんに中立的な傍観者として当時の事件・出来事を観察していたわけではなく、当時主要なメディアだった新聞を通じて、しかもいくつかの新聞を読み比べながら、より正確な情報を得ようとし、さらに新聞の編集者・論説員宛に質問や意見を述べた手紙を送っていた。

ソシュールはビスマルクが「公正な仲裁人」として手腕を揮ったベルリン会議の年（1878年）にベルリンに滞在していた。この時期は言語学史にとっても世界史にとっても大きな転換期であり、このときのヨーロッパの外交政策が原因で引き起こされるトルコやクレタ島での虐殺事件について、ソシュールはそれから約18年後の1897年に手稿を書くことになる。これはライブツイヒでの著作の出版からも同じ年月が経過しているということの意味しており、ソシュールにとっては個人的な記憶とも結びついた重大な出来事だった。

1897年にドレフュス事件が新たな展開を見せた際、ソシュールはアルベール・レヴィルの『ある知識人の行程』に関する手稿のなかで「ドレフュス主義者」であることを告白している。この著作はレヴィルの友人である一人の「知識人」がエミール・ゾラの介入以前に独自の仕方でもドレフュス派に転向していく行程を綴った日記だが、この友人は匿名であることを条件にレヴィルに出版を許可した。ソシュールは同じドレフュス派であるはずのレヴィルの著作の署名と日付を疑い、それを批判するための証拠を蒐集した。ソシュールは「真実を愛する者」としてドレフュスの勝訴を望んだが、そのために真実が犠牲になってはならないと考えていたのである。ソシュールは、ゾラがスローガンとして掲げた「真実」と「正義」のうち、前者のみを取る立場のドレフュス派知識人だったと言える。

しかしソシュールは1903年の回想録で「真実にしたがって書く」と宣言しながら、ピクテに関する出来事を2年早い日付に書き換えようとした形跡がある。従来ソシュールがピクテに処女論文を捧げたのは1872年、14歳のときとされていたが、1996年に発見された新資料によれば、実は1874年、16歳のときである。「印刷された日付の原理」によって鳴鼻音発見の優先権を主張できなかったソシュールは、自分の著作の剽窃疑惑を払拭するために、最低限独創性・独自性を確保しておかなければならなかった。そのため同郷の師ピクテとの交わりは、言語学的活動の心理的な出発点として、ドイツ人研究者たちの発見や著作に先行していなければならなかったのである。

この回想録をソシュールは友人であるシュトライトベルクに託そうとしたが、結局生前に自身では送らなかった。しかしライブツイヒの青年文法学派に属するこのドイツ人の友人に回想録の処遇を委ねるのは、レヴィルの友人同様、きわめて政治的な身振りではないだろうか。ソシュールは自分の著作が「可笑しい剽窃者の作品」として読まれないようにするために、エルネスト・ラヴィスに倣い、慎重に、自分の利害の観点から、自己弁護を試みたのである。